

小児の抗生物質治療における経済性の考察

静岡支部 企画総務グループ スタッフ 渡辺 千晶

企画総務グループ 名波 直治

概要

【目的】

小児における呼吸器疾患は罹患件数の第一位であるが、治療における抗生物質のジェネリック使用割合は他の年齢階級と比べ低い。そこで本研究では、保険者の立場から経済性に着目し、0歳から14歳における抗生物質の先発・後発医薬品における処方日数、受診回数、医療費といった医療コストを比較分析する。

【方法】

調査対象として、0-14歳の2016年11月、12月、2017年1月調剤レセプトより先発医薬品として、セフゾン細粒小児用10%100mg、メイアクトMS小児用細粒10%100mgを調剤された群、及び上記2剤の後発品が調剤された群における処方（調剤）日数、調剤点数、受診回数を比較した。

【結果】

- 処方日数：セフゾンにおいては中央値が5日、後発医薬品が4日であった。またメイアクトにおいては、後発ともに中央値は5日であった。
- 調剤点数：セフゾンと後発品群における点数差（中央値）は85点、メイアクトと後発品群における点数差（中央値）は82点であり、いずれも後発品群が低かった。
- 受診回数：セフゾン、メイアクト、各後発品群ともに中央値は1回であった。

【考察】

治療効果を得るための処方日数はセフゾン、メイアクト・各後発医薬品群間でともに同等といえる。

調剤点数では、セフゾン、メイアクトともに後発医薬品群との調剤点数差が80点程見られ、薬価差だけでなく総合計で比較しても後発医薬品の経済性が高いことが示唆された。

先発・後発医薬品群ともに1回の受診で、同等の処方日数により治癒に至っている可能性が示唆された。

【目的】

医療コストの最適化を考えた場合、罹患件数の多い疾病の薬剤治療におけるジェネリック医薬品使用割合が高まることが効果的と考えられる。

罹患件数の多い疾病は年齢階級ごとに異なるが、小児においては、呼吸器疾患が 32.4%と第一位の状況である。呼吸器疾患などの感染症においては、使用の是非は分かれるところではあるが、抗生物質の選択も多い。しかしながら、抗生物質のジェネリック医薬品使用割合を年代別でみると、0-4 歳では 37.6%、5-9 歳では 42.3%、10-14 歳では 48.9%と全年代の 55.5%と比較しても低い。

そこで、本研究では保険者の立場から医療コストに着目し、0 歳から 14 歳における抗生物質使用時の先発医薬品、後発医薬品にかかる処方（服薬）日数、受診回数、医療費といった総合的なコストを比較し分析する。

【方法】

調査対象として 0-14 歳の 2016 年 11 月、12 月、2017 年 1 月調剤レセプトのうち、以下の薬剤がある者を抽出。

先発：セフゾン細粒小児用 10% 100mg（以下セフゾン）

後発：セフジニル細粒小児用 10% 100mg 「サワイ」「日医工」「ファイザー」
セフジニル細粒 10%小児用 100mg 「トーワ」

先発：メイアクト MS 小児用細粒 10% 100mg（以下メイアクト）

後発：セフジトレンピボキシル細粒 10%小児用 100mg 「日医工」
セフジトレンピボキシル細粒小児用 10% 100mg 「トーワ」
セフジトレンピボキシル小児用細粒 10% 100mg 「サワイ」

上記薬剤ごとの処方日数（平均値、中央値）、調剤点数（平均値、中央値）、初診からの受診回数（平均、中央値、受診回数ごとの人数構成割合）を求めた。

【結果】

セフゾンと、メイアクトにおける各後発品群との処方日数、調剤点数、受診回数の比較結果を表 1 に示す。

なお、調剤点数は、薬価のほか調剤基本料などレセプトに算定されているすべての項目を含んで抽出した。

表 1 先発・後発品群における処方日数、調剤点数、受診回数

先発 セフゾン細粒小児用10%100mg (2,604件)					後発 左記薬剤後発群 (832件)				
	平均値	中央値	5パーセンタイル値	75パーセンタイル値		平均値	中央値	5パーセンタイル値	75パーセンタイル値
処方回数	4.99	5	3	5	処方日数	4.43	4	3	5
調剤点数	587	426	-	-	調剤点数	501	341	-	-
受診回数	1.66	1	1	2	受診回数	1.63	1	1	2

先発 メイアクトMS小児用細粒10%100mg (7,464件)					後発 左記薬剤後発群 (1,737件)				
	平均値	中央値	5パーセンタイル値	75パーセンタイル値		平均値	中央値	5パーセンタイル値	75パーセンタイル値
処方日数	5.02	5	3	5	処方日数	5	5	3	5
調剤点数	718	551	-	-	調剤点数	615	469	-	-
受診回数	1.86	1	1	2	受診回数	1.78	1	1	2

図 1、2 にセフゾン、メイアクトと後発品群における処方日数の比較を示す。

図 1 セフゾンと後発品群の処方日数

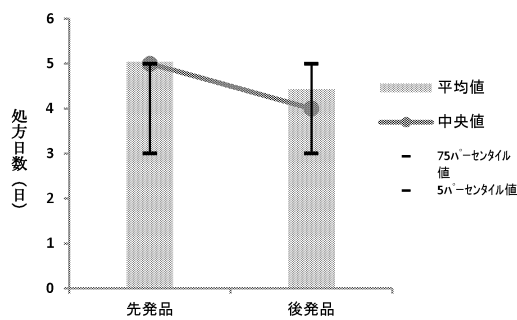
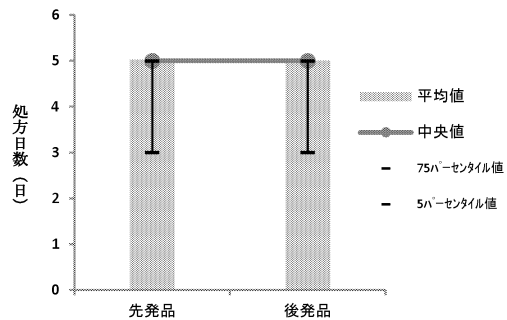


図 2 メイアクトと後発品群の処方日数



セフゾンの処方日数は 5 日、後発品群は 4 日、メイアクトにおいては、後発品群ともに 5 日であった。(中央値)

図 3、4 にセフゾン、メイアクトと後発品群における調剤点数の比較を示す。

図 3 セフゾンと後発品群の調剤点数

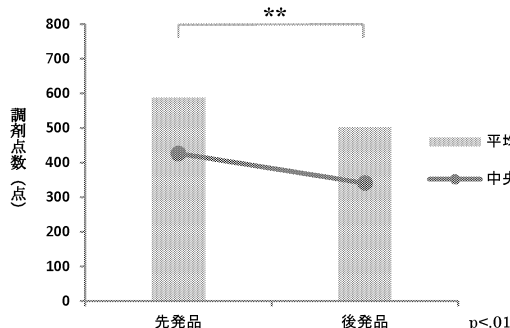
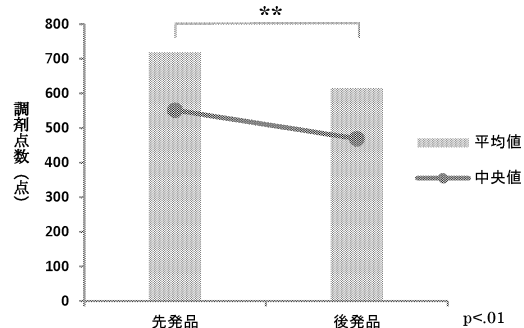


図 4 メイアクトと後発品群の調剤点数



セフゾンと後発品群の差は 85 点、メイアクトと後発品群の差は 82 点で、いずれも後発品群が低かった。(中央値)

なお、先発品と後発品群の平均値において Welch の検定を行ったところ、有意差がみられた。

セフゾン・後発品群 $t=5.502$ 、 $df=1658.159$ 、 $p<0.01$

メイアクト・後発品群 $t=8.416$ 、 $df=2844.412$ 、 $p<0.01$

図 5、6 にセフゾン、メイアクトと後発品群における受診回数の比較を示す。

図 5 セフゾンと後発品群の受診回数

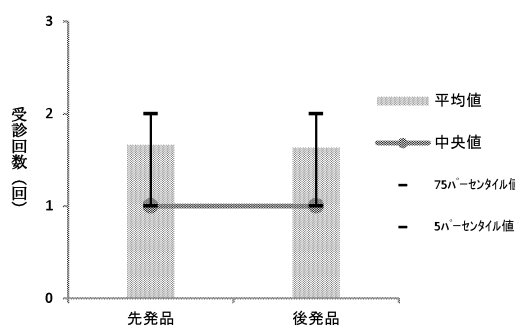
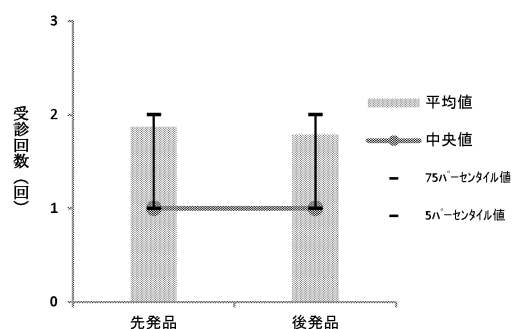


図 6 メイアクトと後発品群の受診回数



セフゾン、メイアクト、両後発品群ともに受診回数は1回であった。(中央値)

【考察】

➤セフゾン、メイアクト、後発品群ともに治療効果を得るための処方日数は先発医薬品と後発医薬品群ともに同等といえる。

➤調剤点数では薬価に他の加算を加えても、先発医薬品との点数の中央値の差はセフゾンの後発医薬品群が-85点、メイアクトの後発品群が-82点であったことから、医療費を抑制することが明らかになった。

➤受診回数では、セフゾン、メイアクトと各後発医薬品群のいずれも、受診回数が著しく多いレセプトがごく少数存在し、平均値が引き上げられている。

➤先発医薬品、後発医薬品群ともに全件数の半数以上は受診回数が1回で完結しており、完結率はセフゾン 58.8%、後発医薬品群 61.7%、メイアクト 51.4%、後発医薬品群 54.3%であった、先発医薬品、後発医薬品群ともに1回受診し、同等の処方日数で治療に至っている可能性が示唆された。

【結論】

小児における抗生物質使用においては、効果が高い薬剤⇨先発医薬品というイメージが従来のジェネリック医薬品の選択に影響していた可能性があると思われる。

しかしながら、本研究で分析した先発2剤の後発医薬品群では、処方日数、

受診回数（再受診にならない可能性）ともに先発医薬品と比べ同程度の効果、経済性が期待でき、かつ医療費全体で比較しても先発医薬品群と比べ低く抑えられることから総合的な医療コスト抑制に資するものと考えられる。

【備考】

第 23 回日本薬剤疫学会学術総会で発表。